

1. 今、イスラエルよ。あなたがたが行なうように私の教えるおきてと定めとを聞きなさい。そうすれば、あなたがたは生き、あなたがたの父祖の神、主が、あなたがたに与えようとしておられる地を所有することができる。
2. 私があなたがたに命じることばに、つけ加えてはならない。また、減らしてはならない。私があるあなたがたに命じる、あなたがたの神、主の命令を、守らなければならない。
3. あなたがたは、主がバアル・ペオルのことでなされたことを、その目を見た。バアル・ペオルに従った者はみな、あなたの神、主があるあなたのうちから根絶やしにされた。
4. しかし、あなたがたの神、主にすがってきたあなたがたはみな、きょう、生きている。
5. 見なさい。私は、私の神、主が私に命じられたとおりに、おきてと定めとをあなたがたに教えた。あなたがたが、はいって行って、所有しようとしているその地の真中で、そのように行なうためである。
6. これを守り行ないなさい。そうすれば、それは国々の民に、あなたがたの知恵と悟りを示すことになり、これらすべてのおきてを聞く彼らは、「この偉大な国民は、確かに知恵のある、悟りのある民だ。」と言うであろう。
7. まことに、私たちの神、主は、私たちが呼ばわるとき、いつも、近くにおられる。このような神を持つ偉大な国民が、どこにあるだろうか。
8. また、きょう、私があるあなたがたの前に与えようとしている、このみおしえのすべてのように、正しいおきてと定めとを持っている偉大な国民が、いったい、どこにあるだろう。
9. ただ、あなたは、ひたすら慎み、用心深くありなさい。あなたが自分の目を見たことを忘れず、一生の間、それらがあなたの心から離れることのないようにしなさい。あなたはそれらを、あなたの子どもや孫たちに知らせなさい。
10. あなたがホレブで、あなたの神、主の前に立った日に、主は私に仰せられた。「民をわたしのもとに集めよ。わたしは彼らにわたしのことばを聞かせよう。それによって彼らが地上に生きている日の間、わたしを恐れることを学び、また彼らがその子どもたちに教えることができるように。」
11. そこであなたがたは近づいて来て、山のふもとに立った。山は激しく燃え立ち、火は中天に達し、雲と暗やみの暗黒とがあった。
12. 主は火の中から、あなたがたに語られた。あなたがたはことばの声を聞いたが、御姿は見なかった。御声だけであった。
13. 主はご自分の契約をあなたがたに告げて、それを行なうように命じられた。十のことばである。主はそれを二枚の石の板に書きしるされた。
14. 主は、そのとき、あなたがたにおきてと定めとを教えるように、私に命じられた。あなたがたが、渡って行って、所有しようとしている地で、それらを行なうためであった。

説教

過去の回想はひとまず終えて、続いてモーセは神の教えである律法について話し始めます。4章1節は、これか

ら語り始める律法の何たるかを最初に教える要約と言えます。「今、イスラエルよ。あなたがたが行なうように私の教えるおきてと定めとを聞きなさい。そうすれば、あなたがたは生き、あなたがたの父祖の神、主が、あなたがたに与えようとしておられる地を所有することができる。」(1) 「定め」の原意は「刻まれたもの」で、「神の制定、定め」を意味します。「おきて」は「裁判、判決、さばきの執行」を意味します。神の民イスラエルは、神の律法とそのさばきの執行とをよく「聞く」ことで、「生き」、神の約束の地を「所有することができる」と言うのです。これまで1章から3章で見てきた過去の反省を踏まえての言葉です。神の定めとさばきを蔑ろにして、第一世代は約束の地を見ずして荒野で死に絶えました。神の「おきてと定め」を「聞く」ことは、イスラエルのいのちであり、祝福への唯一の道なのです。

それでモーセは続けて、どのように神の「おきてと定め」を聞くべきかを教えます。「私があなたがたに命じることばに、つけ加えてはならない。また、減らしてはならない。私があなたがたに命じる、あなたがたの神、主の命令を、守らなければならない。」(2) 「つけ加える」とは、あたかも神の律法だけでは足りないかのように、別の教えを付け加えることです。例えば、律法で「地の十分の一は地の産物であれ、木の実であれ、すべて主のものであって、主に聖なる物である」(レビ記 27:30)と、自分の全収入の十分の一を神にささげるよう教えられると、「はっか、いのんど、くみん」といった自分の家の庭の雑草まで神にささげるよう「つけ加え」ます。こうして、イエスさまの時代には律法に多くのしきたりが「つけ加え」られました。一方、「減らす」と訳される言葉は「小さくする、減らす、抑制する、捨てる、引っ込める、取り下げる」の意味で、同じ「地の十分の一は地の産物であれ、木の実であれ、すべて主のものであって、主に聖なる物である」との教えで言えば、現実に自分の全収入の「十分の一」を献金することが難しいために、「そこまでしなくてもいいだろう」と勝手に自分で解釈して、神のことばを「減らす」、あるいは「引っ込める」ことです。その結果、「十分の一」の献金は、「二十分の一」になったり、「百分の一」になったりします。そうすると、それはもはや「神のことば」とは言えず、「人の言い伝え」になり下がり、イエスさまはそれが神のことばを「ないがしろにする」「捨てている」「無にする」と痛烈に批判なさいました。(マタイ 15:1-6, マルコ 7:1-13)

神のことばは神のことばとして聞かなければなりません。いいとこ取りで、神のことばを自分の都合よく自分勝手に引用するだけなら、忌むべき悪霊憑きの異端や邪教だっています。聖書には天国も記されていますが、同時に地獄も記されています。神が愛であることも教えられますが、同時に罪をさばくことも記されているのです。黙示録の巻末で使徒ヨハネは次のように締め括ります。「私は、この書の預言のことばを聞くすべての者にあかしする。もし、これにつけ加える者があれば、神はこの書に書いてある災害をその人に加えられる。また、この預言の書のことばを少しでも取り除く者があれば、神は、この書に書いてあるいのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれる。」(黙示録 22:20-19)

神のことばを決して嘗めてはいけません。モーセが教えるように、神のことばは私たちのいのちです。「私があなたがたに命じる、あなたがたの神、主の命令を、守らなければならない」のです。もしも人が神のことばを蔑ろにするなら、「バアル・ペオル」の事件のように神に「根絶やし」にされます(申命記 4:3)。その時二万四千人が神罰で死にました(民数記 25 章)。既に見た申命記 2 章 14 節の記事を参考にすると、この時死んだ二万四千人は、荒野で死に絶えると宣告された旧世代ではなく新世代でしたが、それだけに、ここでモーセの遺言を聞いている新世代にとっては説得力があります。たとえ新世代であっても、神に背いた者が二万四千人も、容赦なく神罰で打たれて根絶やしにされたのを彼らは「その目で見た」のです(申命記 4:3)。

これに対し、「あなたがたの神、主にすがってきたあなたがたはみな、今日、生きている」のでした(4:4)。「すがると訳されるのは「しがみつく、密着する、執着する」の意味で、神のことばから離れることなく密着し、そ

れを守ることに固執し執着して来た者たちは「今日、生きている」と言うのです。

神のことは単にイスラエルを生かすだけではありません。それは、これから入植するカナン地をはじめとするその周辺諸国、さらには全世界にとってもいのちと祝福をもたらすものです。それで、モーセはこう続けます。「見なさい。私は、私の神、主が私に命じられたとおりに、おきてと定めとをあなたがたに教えた。あなたがたが、はいつて行って、所有しようとしているその地の真中で、そのように行なうためである。」(5) モーセが神の言葉をイスラエルに忠実に教えたのは、イスラエルのためのみならず、彼らが「はいつて行って、所有しようとしているその地の真中で、そのように行なうため」だと言うのです。かつて彼らの先祖アブラハムを神が特別に「選り出したのは、彼がその子らと、彼の後の家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公正とを行わせるため」だと神は言われました(創世記 18:19)。それにより「地のすべての国々は、彼によって祝福される」というのが神の計画でした(18)。

そしてここでは、モーセがイスラエルに神の律法を教えたのは、イスラエルが生き祝福されるためでもあるけれども、神の計画はそれにとどまることなく、彼らがこれからカナンのど真ん中で神の律法を行うことで、カナンとその周辺諸国、さらには「地のすべての国々」が生き、祝福されるためなのでした。それでこう続けます。「これを守り行ないなさい。そうすれば、それは国々の民に、あなたがたの知恵と悟りを示すことになり、これらすべてのおきてを聞く彼らは、『この偉大な国民は、確かに知恵のある、悟りのある民だ。』と言うであろう。」(申命記 4:6)「知恵のある」とは「物事の道理をよく熟知した知恵者」、「悟りのある」とは「洞察力の優れた者」の意味で、それが「確かに」そうだと言うのです。つまり、偽物ばかりの世の中で神の教えを初めて聞く異邦人たちは、「これこそ本物の知恵者だ、物事の真理・本質をよくわかっている！」と驚嘆すると言うのです。これは実に面白いことです。

これを受けて、モーセはこうさらに解説します。「まことに、私たちの神、主は、私たちが呼ばれるとき、いつも、近くにおられる。このような神を持つ偉大な国民が、どこにあるだろうか。また、きょう、私があなたがたの前に与えようとしている、このみおしえのすべてのように、正しいおきてと定めとを持っている偉大な国民が、いったい、どこにあるだろう。」(7-8) 日本語でも伝わりますが、ヘブライ語の原文では7節と8節は全く同じ構文で、「こんなに偉大な国民が他にいるか」とイスラエルの「偉大」さが強調されています。イスラエルの偉大さの第一の理由は、彼らが「神を持つ」ことです。そして第二の理由は、彼らが「正しいおきてと定めとを持っている」ことです。この二つは同じ事とも言えます。すなわちモーセは「正しいおきてと定め」と「神」を同義に考えているのです。

イスラエルの神は木偶の坊ではありません。いかなる形も「御姿」も人々に見せることなく、ただ「ことば」によって御自身をあらわします。「二枚の石の板」「十のことば」すなわち十戒で御自身をあらわします(11-14)。モーセが人々に教えた「正義のおきてと定め」とは、言わば神の人格そのものなのです。そして天地万物を造られた神の人格である律法は、最初にアブラハムの子孫であるイスラエルの民に与えられました。イスラエルは神の民なのです。神ご自身の民です。彼らには神がいます。神が彼らと共におられるのです。呼べばすぐそこにおられます。「あなた」と呼べば「なんだい」と応える、ではありませんが、誰よりも最も近く、親しい関係なのです。これほど「偉大」な事実はありません。これ以上に「巨大な」事実はありません。世界の人々は彼らを通して神を知り、神のみこころを知るのです。

この世界には、裕福な国があり、文明の進んだ文化大国があり、強大な軍事力を誇る軍事大国があります。でも神のことは、小さなイスラエルに委ねられました。神はイスラエルを特別に選びました。イスラエルを通して世界の人々は神を知ります。イスラエルを通して世界中の人々は神の恵みとみこころとを知らされます。イスラエル

は神の民です。「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される」のです。神の民なのですから、これ以上に偉大な民はありません。世界広しといえども、神の民以上に偉大な国民はこの地上には存在しません。神を持ち、神の「正義のおきてと定め」を持つイスラエルは、世界最高、世界最強の民、神の民なのです。

「ただ、あなたは、ひたすら慎み、用心深くありなさい。」(9 節前半)とは「(神の教えを)よくよく自分の頭で考えて確かに固く守り、守れ」といった極めて強い強調表現です。「あなたが自分の目を見たことを忘れず、一生の間それらがあなたの心から離れることのないようにしなさい。」(9 節前半)の文字通りの訳は「あなたの目が見た(神の)ことばを忘れることなく、一生の間それらがあなたの心(人格と存在の中心である心)から離れることのないようにしなさい」となります。つまりモーセはここで、とにかく神の教えを忘れることなく、一生涯心から離れることなく、確実に、本気で、「固く守り、守れ」とひたすらに強調するのです。結局これに尽きます。

「あなたはそれらを、あなたの子どもや孫たちに知らせなさい」とも教えられます(9 節後半)。神の律法は世界に広がりを持つだけではありません。「あなたの子どもや孫たち」という後の世代にも伝えられていかなければなりません。これは後の時代にも通用する教えです。千年、二千年、四千年と時代が変わっても、神のことばは罪人にいのちと祝福をもたらします。これは永遠にいのちある神のことばなのです。神のことばは世界中の人々を教えます。神のことばはあらゆる時代の人々を教えます。生きとし生けるすべての者は、神に聞き従わなければなりません。場所を越え、時代を超えて、神のことばは救いと祝福をもたらすのです。